神がお与えくださった二つの律法

２０２５年８月１日
西九州伝道所
佐々木正明

キリスト教について勉強していると、驚かされてしまうことがいくつもあります。特に私は、プロテスタントのキリスト教に所属し、その中でも福音派と言われるグループの一つに属し、中でも、聖書を間違いのない神の言葉であると固く信じる、保守系のグループの中で育ち、活動をしてきました。私がこの仲間たちに加わったのは１９６０年のことですから、もうほとんど６５年も昔のことです。

その６５年間の間、私は聖書学校で３年間の学びをし、その後は、まだ教会のない所で伝道の働きをする、いわゆる開拓伝道者、あるいは宣教師として過ごしてきました。その間、伝道者として生活しながら、さらに４年間の神学校での学びをし、多くの学友や教授たち、さらに、様々な国の秀でた牧師や宣教師、あるいは様々な分野での指導的立場の人たちと交わりを体験し、とても素晴らしい学びの時を与えられて来たと、喜んでいます。ただし私の学びは、宣教学という非常に狭い分野に限られ、他の学びはすべてこの宣教学に関わるものとして、学んできたものです。

そのような中で、私が驚かされた問題の一つに、自分たちはプロテスタントの聖書主義という基本的な立場、あるいは神学的基盤に立っていながら、あまり聖書的ではないという事実があります。たしかに、私たちはプロテスタントとして、聖書の教えに立つと自覚しながらやってきましたが、ちょっとだけ勉強をすると、とてもそんなことを言えたものではないことがわかります。

私たちプロテスタントの先覚者たちは、たしかに、自分たちが問題を感じた分野では、大胆にカトリックの「聖書によらない」、あるいは「非聖書的」な、もっと言うと「反聖書的な」教理に大胆に戦いを挑み、カトリック教会に追放されてしまっても、聖書の教えに立とうと努力してきました。しかし、自分たちが問題と感じなかった、さらにたくさんの事柄では、非常に保守的なカトリックの教えをそのまま、頑なに引き継いできました。例えば人種差別の問題、例えば植民地主義の問題、奴隷の問題、女性差別の問題。例えば、聖職者と平信徒の差別の問題、洗礼や聖餐の理解の問題と、挙げるときりがありません。それらの問題が、人類の歴史にどれだけ多くの悲劇をもたらしてきたかを冷静に調べると、

自分がクリスチャンと言われる人間であり、その信仰を語り伝える働きをして来たことに、痛烈な痛みと悲しみを覚えるものです。それに耐えられなくなった私は、もう、かなり長い間、自分はキリスト教徒を辞めたと宣言し、キリスト教の牧師ではないと公言してきました。私はキリスト教の牧師でも、伝道者でもなく、聖書を教える牧師である、キリストの教えを説く伝道者であると、空しく言い続けています。それが、私にできるせめてもの「正直な態度」だと思うからです。

そう言って、私がキリスト教と呼ぶ西欧の宗教を改めて見直すと、そこここに、大変大きな間違いが見つかります。今日はその内の一つについて、改めて取り上げます。改めてというのは、私はこの問題についてここ３０年ほど、幾度も繰り返して語ってきましたが、まだ、言い足りない、表現できていない、掘り下げが不足している、これでは他の方々に理解できないと感じるからです。今日取り扱う問題は、聖書の中に記されている、二つの異なった律法についてです。

聖書には、二つの異なった種類の律法について、非常に明快に教えられています。ただし、私の６０年を超えるクリスチャン生涯の中で、この事実を重い問題として取り上げた人にも、書籍にも、論文にも遭遇したことがありません。というより、この問題について論じた説教や聖書の勉強会にも行き当たったことがありませんし、テキストにも出会ったことがありません、使徒パウロは、彼の書簡の中で、しばしばこの問題に触れていますし、決して無視できるような小さな事柄としてはいません。ただ、たしかに言えることは、パウロはこの問題を発展させて論じてはいないと言うだけです。当時の彼の、使徒としての働きから、少しだけ、ほんのすこしだけ、脇道にそれていたためのようです。しかし、今の私たち日本人という異邦人にとって、またその異邦人の宣教を目指す私たちにとっては、非常に重大な問題なのです。

聖書には、まず、すべての人類に与えられている律法が記されています。この「すべて」にはイスラエル民族、後にユダヤ民族と呼ばれるようになった人々も含まれています。これは人間が人間として造られた時、人間にだけ与えられた特殊な性質、あるいは本源的人間性とでも呼ぶべきもので、使徒パロはこの律法のことを、ロマ書 2 章１２‐１５に於いて、「人間自身」あるいは「心に記された律法」と呼んでいます。これは、聖書の天地創造の物語の中の、人間の創造に関わる記述として、創世記の 1：26‐27 節に教えられていることにつながり、人間は神の姿に似せて造られたという、事実に基づくものです。そしてこの記述は、人が土くれから形作られ、改めて、神の命の息を吹き込まれて、生きるようになったという補足説明で、さらに強化されています。人間はあらゆる動物の中で、唯一、神の姿に似せて造られた存在です。ここに、人間は、人間として独特な価値を与えられ、その価値によって生きるようにされているのがわかります。

人間はあらゆる動物と、類似の命を与えられています。動物としての命を持っています。しかし、神に似せて造られたのは、人間だけです。人間は初めから、神の姿、すなわち神の性質を持つものとして造られているのです。ばかばかしいことのようですが、繰り返します。人間は神に似ているのです。人間を見るとある程度神について知ることが出来るのです。ですから、イエス様の教えのなかでも、放蕩息子の譬えの父親の姿は、神の姿を思い出させるために語られたもので、あの父親の中に、神の姿を見るように語られたのです。イエス様によれば、放蕩息子の父親のような立派な人間だけではなく、悪い父親の中にさえ、神の姿を見ることが出来るのです。「わるい父親であっても、自分の子供には良い贈り物を与えるとすれば、なおさら、天の父は・・・・」とイエス様は語っておられます。

神の姿に似せて造られたという事実は、どういうことでしょう。それはまず、人間が神と心を通わせることが出来る、高等な意識、神意識を持ち、神を感じ、神を知ることが出来る感覚を持たされているということです。これは、神を知的に理解するということではありません。あくまでも、神を感じ、神を意識し、神と交わろうとする、心を持つということです。それは本能という言葉で表すのが良いと思われる性質です。この本能によって神を求めないではおれない人間の性質は、ちょうど乳飲み子が母親の乳を求めてやまないのと同じです。何の後天的な知識がなくても、生まれたばかりの赤子は母親の乳を求めるのです。この本能がなくては、人間は生きることができません。

ですから、地上のすべての民族は、神を求めるのです。神という言葉がすでに、日本の得意な宗教感覚の汚染を受けた言葉になっていますので、ここでは。目に見えず、手に触れることが出来ず、言葉で説明もできない、気高い存在とでも、言いかえておきましょう。日本の神道の、気高い神意識に通じるものです。八百万の神々を信仰する通俗的神道とは、一線を画す神道の神意識です。神道は神という表現を用いてはいますが、本来の気高い神道には、八百万の神々という意識は存在せず、目で捕らえることが出来ず、手でふれることもかなわず、言葉で説明することもできない、至高の存在を崇めているのです。現代の私たち日本人には、普通この気高い神意識と、通俗的神意識が混在していて、ともすれば、気高い神意識がぼやけてしまいがちですが、良く自分を見つめてみると、気高い神意識が残っていることに、気づくこともあるのです。ですから、日本人の多くも、自分は無宗教である。神なんて信じてはいないと言いながら、気高い存在者に気付いていて、良くは分からないままにも、宗教心を大切にし、宗教を大切にしているのです。

この気高い神意識に気づいている日本人は、たとえその神がどのようなお方であるか､確かなことは知らなくても、また無神論者を自認していても、このお方を崇め、感謝し、褒めたたえ、礼拝をし、礼拝する他人を馬鹿にすることもないのです。それだけでなく、神

の姿に似せて造られたということは、愛の神として永遠から存在し続けた「多神格の神・普通、父・子・聖霊なる神と呼ばれる神」に似せられて、人間同士が互いに愛し合う存在として造られています。人間は、ただ、地政学的な環境や、生活環境によってではなく、たとえば、日本が四方を荒海に囲まれて、ちょうどよく他民族から隔離されていて、独特の共同体文化を作り上げげたとか、稲作という最も定着性の強い生活環境の中に、特異な共同体文化を形成することが出来たというだけではなく、人間の発祥自体の中に、愛し合うという共同体意識を与えられているということです。またその人間性の中には、自然を治めるという本能も与えられていました。この自然を治めるという本能を、自然を支配すると考えたのは、西欧キリスト教の間違いで、神ご自身がご覧になって、「これは良い」と思われた自然と仲良く共存しながら、これを管理するという意味だと捕らえるほうが正しいのです。これは日本人の自然に対する考え方に通じます。日本人はあらゆる自然物だけでなく、人造物の中にも神が宿ると感じるらしいのですが、それも、神はすべてのものを超越し、すべてのものを貫き、すべてのものの中に住み、すべてのものをご自分の内に収めておられるという、聖書の教える神理解に通じます。

　このような感覚が、実はすべての人間に与えられていたのです。ただ、日本人だけが、多分、日本人だけが、特別に、この感覚を色濃く保持してきたと言えそうです。その理由は筆者の他のエッセイで取り扱いますが、簡単に触れておきます。それは日本人の宗教感覚、神意識の中にある神は、多くの他の民族のような偶像ではないからです。日本人が本来持っていた神意識は、目に見えない神、手で触れることができない神、言葉で説明することもできない、気高く尊い神であって、そこに偶像の入る余地がないのです。もともとの神道には偶像がないのです。広い世界を見渡すと、日本人だけが、このような神意識を持っていると断言することはできないかもしれません。他の民族、あるいは部族の中にも、日本人に似ている人たちが、かなりいるのではないかと思います。たとえば、筆者が長年宣教師として交わりを持って来た、フィリピン北部山岳地に住むイゴロット族にも、神道によく似た神意識があるのです。アフリカで宣教師をしていたという、日本人牧師と話したとき、アフリカで奇妙なマスクを持って踊る人たちにも、偶像はないということでした。ただ日本と同じように、彼らも偶像礼拝をしていると、西欧の宣教師たちに烙印を押されてしまっただけだということでした。

　さて、せっかく神の姿に似せて造られ、小さいながら家族という共同体を作って、生活を始めた人間ですが、すこし後には、神に逆らってしまいます。これは神の人間創造の最終テストの段階で、失敗してしまったということです。これは神の創造の失敗ではなく、創造の最終段階で、絶対に通らなければならない、テストだったのです。人間はやはり神に似せて、自由な意思を持つ存在として造られたのです。神に従うことしかできない存在

ではなく、神のように選択の自由を持つ存在にとして、自分の意志で神に素直に従う選択をすべきだったのです。神に従う選択をした瞬間、人間の創造は完成を迎えたはずだったと、考えるのです。ところが人間は創世記のはじめの部分で田園的な描写で描かれているように、神に反抗をしてしまったのです。小さな犯行でした。ほとんど実害の無い反抗でした、しかし反抗は反抗。この時から人間は絶対に聖い神に拒絶され、神の許を追い出され、帰ってくることが出来ないようにされてしまいました。人間は悪魔の手の内に落ちたのです。悪魔の支配、悪魔の国の中に入れられてしまったのです。そのときから、この世に生まれた人間は、皆、悪魔の支配の中に生まれた者となり、悪魔の手段である罪の力に支配されて、生きるようになってしまったのです。（筆者の「神の国」という講座を学んでください。）この時から人間はすべて、原罪などという非聖書的なギリシヤ哲学で説明されたような意味で罪人なのではなく、神の御許を離れて悪魔の支配の中で生まれ、悪魔の支配の中で生きるために、罪人なのです。すべての人間は、民族・部族・国家の区別はなく、肌の色、言葉の種類の差別もなく、悪魔の支配の中に、霊的にはすでに死んだものとして、生きているのです。つまり霊的な命の命の源としての神から隔離された状態で、生きているのです。イエス様の教えでは、ぶどうの木から切り離された枝として、まだ、何とか完全には命を失わないで、生存しているのです。しかし彼らの未来は、このままでは永遠に神から隔離され、霊的には死んだ状態で、不幸な生き方、つまり、完全な死の中に陥ってしまうのです。

　ところが、私たちの父なる神、天地と人間の創造者は愛の神です。神は私たち人類を住救い出そうとしてくださいました。悪魔の支配から神の支配（これを普通、神の国と呼んでいます。）に移す計画を立て、これを遂行してくださいました。この神の国に人類を移す計画、神の支配に取り戻す計画の最初の部分に、やがて神が送ってくださる救い主（メシヤ、あるいはキリスト）を迎え入れ、キリストの働きを支援する民族をお選びになりました。この選ばれた民族がユダヤ民族です。ユダヤ民族（初めのうちはイスラエル民族と呼ばれるのが普通でした。）は神の人類救済の計画の遂行のために、選ばれた特異な民族だったのです。

　特別な民族的使命を与えられたユダヤ民族には、その任務遂行のために、ユダヤ民族に限って、特異な律法が与えられました。ユダヤ民族だけに与えられた特別な律法です。この律法は、元々ユダヤ民族の書物、あるいはユダヤ教という宗教の聖典であった、旧約聖書の中に記されています。ここで、旧約聖書と律法の関係に、少しだけ触れておきます。混乱しやすいからです。もともと、ユダヤ人だけに与えられた律法は、モーセの律法とも呼ばれ、旧約聖書のはじめに置かれ、モーセが書いたと言われている五つの書物だけを指していました。しかし、旧約聖書全体にも神の教え、神の導きが散りばめられているためか、広い意味で、旧約聖書全体を律法と呼ぶ習慣ができてしまいました。ともあれ、モー

セの律法も、旧約聖書全体も、本来はユダヤ民族に与えられたものですが、そこには、神について、また神の救いのご計画、その計画の遂行に関わる諸問題、そして神に選ばれたユダヤ民族の盛衰の歴史、ユダヤ民族の信仰の思いを吐露した詩歌、さらには、神が送ろうと計画された救い主、メシヤ（ギリシヤ語ではキリスト）についての預言なども含まれています。そのために、ユダヤ教から生まれ発展してきたキリスト教にとっても、なくてはならない書物となっています。それでキリスト教徒は、いつのまにか、モーセの律法を含めて、旧約聖書全体を、自分たちに与えられた書物であると、勘違いしてしまったのです。それだけではなく、キリスト教は、この旧約聖書の特異な律法を、そのまま神の律法として、全人類に適用してこれを押し付け始めたのです。それでキリスト教はとんでもない宗教になり果ててしまったわけです。

現在でも西欧人、すなわち白人たちが作り上げたキリスト教という宗教は、旧約聖書を自分たちに与えられた聖なる経典として保持し、その中のモーセの律法までも、自分たちに与えられたものと理解し、さらに全人類に与えられたものとして、行く先々で、会う人たち全てに、これを守ることを強要しているのです。旧約聖書に記録されているモーセの律法も、旧約聖書に記されている、不従順なユダヤ人を教え導くための神の命令も、すべて、全人類に与えられたものとして、ユダヤ人とは関わりのない異邦人たちにも、適用し始めたのです。そして世界中の、キリスト教以外のすべての宗教を偶像崇拝と断罪して、世界中の文化を異教文化として蔑み、キリスト教文化を強要しているのです。

本来、ユダヤ人に与えられた律法は、ユダヤ人だけに与えられたものとして、ユダヤ人だけが守るべきものでした。他の民族には、すべての人間に与えられた律法、人間として造られた時に与えられた、すなわち神の姿に似せて造られたものとして、霊的な、また社会的な本能として機能する律法がありました。これはユダヤ人たちも守るべき、本源的なものでした。そして、ユダヤ人だけに与えられた旧約聖書に記された律法、神の命令と導きは、神に特別に与えられた使命を遂行するはずの、ユダヤ人だけが守るべきものだったのです。

キリスト教が、なぜ旧約聖書を自分たちに与えられたものとして、取り扱うようになり、旧約聖書に語られているユダヤ民族に対する命令だけでなく、イスラエル民族に対する特別な祝福の約束も、自分たちに与えられていると勘違いするようになったのか。それはふつう置換（ちかん）神学という間違った神学の発展に関わっているのですが、置換神学については、別のエッセイで論じたいと思います。

とにかく西欧キリスト教の、このとんでもない間違いのために、キリスト教は非常に凶暴な血も涙もない宗教になってしまいました。それはキリスト教の歴史を少しだけ学ぶだ

けで、すぐにわかります。キリスト教がやった血みどろの犯罪は、すぐにも数え上げることが出来ます。それらの犯罪の多くは、神がユダヤ人民族を守り導く過程で、ユダヤ民族に対しても、彼らに敵対している諸民族に対しても、取らざるを得なかったかなり残虐な処置を真似て、正当化したものです。回教徒に対するいわゆる十字軍も、植民地制度も奴隷制度も、男尊女卑も、人間性を無視した厳しい処罰も、敵を滅ぼし尽くそうとする戦争も旧約聖書を自分たちに与えられたものと受け取ると、みな正当化できるのです。なにしろ、旧約聖書に現された神の姿は、単純に見ると「戦いに猛き主」であり「万軍の主」であり、敵を憎み滅ぼし尽くす神です。そればかりか、キリスト教内部の争い、たとえばフランスのユグノー（プロテスタントのカルビン派につく者たち）に対するカトリックの弾圧。ドイツで始まった３０年戦争は、当初こそ、カトリックとプロテスタントの純粋な宗教戦争でしたが、すぐに、諸侯間の争いとなって他の国々にも広まり、およそ８００万人の死者を出しました。イギリスでも、国教会の内部で、王制を保とうとする勢力と、共和政治を主張するピューリタン勢力が衝突し、非常に過酷で残虐な戦いが続きました。またアイルランドのプロテスタント系のクリスチャンたちとの戦いも熾烈を極めたのです。これらは、当時のキリスト教会が、新約聖書のより進んだ、ユダヤ教を離れて行く過程の教えよりも、古い、旧約聖書の戦いの教えを模範とした信仰が強かったためです。

　こうしてキリスト教は、新約聖書に現されたより普遍的な神の姿と教えを、殆ど無視することが出来たのです。キリストは平和の君であり、平和を作り出すことの大切さを教え、残虐な律法の行使よりも憐れみがもっと大切だと語り、裁くことよりも赦すことを教え、敵を憎むのではなく敵をも愛するように諭されたキリストは、まったく無視されてしまったのです。また、少し遅れた使徒の時代には、当時のグレコローマンの世界で、自由人よりも奴隷の数が多かったと言われるほどの社会の中で、あるいは男尊女卑が行き渡っていた社会の中で、それらに直接戦いを挑むことなく、反って、静かにそして忍耐深くまた力強く、人間は皆平等であることを説き、奴隷制度や男尊女卑と戦ったパウロの行動と教えなどは、まったく顧みられなかったのです。

　このようにキリスト教の目を覆うばかりの悪は広く、深く、２千年近くもの長い間にわたって続き、今日でもそれらを明らかに見ることが出来るのです。一方、キリスト教がやり遂げた素晴らしいこと、人類に貢献したことはと尋ね、調べると、殆どないのです。いまでこそ、キリストが教えた、「平和を作り出すものは幸いである」という言葉を、看板に掲げているキリスト教は、カトリックを始め少なくないのですが、キリスト教は戦争ばかりしてきたのです。平和を作り上げる働きなど、どこでやったのでしょう？もしやったとするならば、それは旧約聖書を自分のものとするキリスト教ではなく、キリスト教徒の中にも、人間が造られた時に与えられた神に似た姿、人間としての本源的姿を留めている人たちがいて、彼らもその本能に押し出されてやったことであって、キリスト教の功績で

はありません。

キリスト教の間違いの一つは、聖書によらない、「原罪」の神学を打ち立て、人間はすべて罪人であるという、聖書の教えを捻じ曲げて解釈し、人間の存在そのものを罪、汚れ、として糾弾した所にあります。しかし理解しなければならないことは、人間は本来、神の姿に似た者として造られたという事実です。この事実が、罪人となった事実よりも先にあるのです。人間の罪を探し出し、糾弾し、責め立てて止まないキリスト教の前に、神の美しい姿に似せて造られた、人間の本源的姿があるのです。その姿は、罪のために、傷つき、汚れ、捻じ曲げられ、いびつになってしまったとは言え、まだまだ、人間の姿の中にしっかりと残っているのです。その美しい姿をみごとに否定し、悪魔も驚いて身を引いてしまうような、残虐なことをやり続けてきたのがキリスト教です。ちょっと言い過ぎでしょうか。では言い換えます悪魔も驚いて身を引くのではなく、悪魔の手下の小さな悪霊たちも、あまりにも残虐なために恐ろしくなって身を隠すほどの犯罪を、キリスト教は長い年月にわたって、世界中で行ってきたのです。人種差別、植民地制度、奴隷制度、悪魔の手下どもの悪霊たちの世界でも、これほどまでの醜いことが行われたことがあるでしょうか。もしもあるとするなら、それはキリスト教会の中に悪霊たちが入り込んで、やったに違いありません。

私はアメリカの黒人奴隷たちの歌を、忘れることが出来ません。人種差別、植民地制度、そして奴隷制度のために、どれだけ多くの黒人たちが、どれほど苦しんだことか。ちなみに、タイムズ紙が、２０世紀最大の歌に選出した、「Strange Fruit」という歌を、ネットで探し出してでも聞いてみてください。この歌が出来たのは１９３０年代のはじめです。黒人霊歌ではありませんが、黒人奴隷が、白人のアメリカ人（多くは敬虔なキリスト教徒と呼ばれていた南部の人々）にリンチを受け、木に吊るされて死んでいる姿を歌ったものです。英語の歌を聴きとれない方は、歌詞を探し、それを翻訳したものも探し出して、歌の意味を理解してください。さらに私は、黒人霊歌の中で最も悲しい歌の一つだと思う、「Lord How Come Me Here?」という歌を聴いてみてください。できればこれも歌詞を探し出し、翻訳も見つけ出して聞いてみてください。「Amazing Grace」という有名な讃美歌の作者は、以前は奴隷商人をしていましたが、神の前に悔い改めて牧師になったということです。この歌のメロディは、黒人奴隷たちが狩りたてられた、アフリカの象牙海岸の人々が歌っていたメロディに酷似しているそうです。この作者も、キリスト教の教えによって「回心」したのでしょうか。それとも本源的人間性に目覚めて「改心」したのでしょうか。多分後者でしょう。

最後に、この拙い文章を読んでくださったあなたは、まだキリスト教の信徒でいようと思いますか？ 私のようにキリスト教という西欧の人々が作り出した宗教を離れ、本当に聖

書を正しく理解しようとする、聖書を信じる人になろうとは思いませんか？ そして聖書の教えを完全に実行されたイエス・キリストの姿と教えに、素直に従う人になろうとは思いませんか？